

〔講座〕 江戸の腑分と小塚原の仕置場

石出 猛 史

(2007年9月25日受付)

要 旨

旧幕時代、江戸小塚原の仕置場では磔刑・火刑および梟首が行われ、罪囚のみならず江戸市中で弊れた牛馬も埋葬されたが、処刑された罪囚の遺体を用いて度々人体解剖も行われた。小塚原の仕置場で解剖が行われた理由として、小伝馬町の牢屋敷で処刑された罪囚の埋葬地であったことから、遺体の管理をする上で都合であったためと考えられる。明和8年に杉田玄白が関った解剖は医学史上特筆されている。その理由として、実見した人体の内部構造と比較して、ドイツの解剖学書をオランダ語に訳した“Taffel Anatomia”の記述が正確であることを確認し、同志と共にその解剖学書の日本語訳を行い、これを出版したこと。さらにこの事業が後の蘭学研究の隆盛をもたらしたことが挙げられる。『蘭学事始』の記述から、岡田養仙・藤本立泉ら、幕府の医師が早くから解剖に立ち合ってきたことは明かである。また幕末には、幕府種痘所の医師たちが解剖を行った記録が残されている。しかし幕府の医師たちによる解剖の観察記録は見出されていない。幕府の非公開主義によるものであろうか。従って『臓志』を著した山脇東洋以前に、解剖を行った医師がいないとは断定できない。

Key words: 江戸の腑分, 小塚原の仕置場, 様斬, 後藤光生

はじめに

一昨年から昨年春にかけて、医学史に関する2つの企画展が開催された。一つは『村のお医者さん－小櫃村・駒医院の軌跡－』（千葉県袖ヶ浦市立郷土博物館 平成18年10月14日－11月26日）で、筆者は協力員として関与した。簡見した限りでは、千葉県内の公的博物館で医学史に関する企画展が催されたのは、平成6年（1994）国立歴史民俗博物館における『新収蔵品展 佐倉順天堂の150年－近代医学教育の先駆－佐藤道夫家資料』以来のことである。

企画展『村のお医者さん』は、「生命の継承」と「地域に生きる」をテーマとして、小櫃村（現君津市）で昭和8年から2代にわたって医院を開業した駒家を中心として、君津・木更津・袖ヶ

浦・富津地方の開業医と当時の医療について紹介している（図1）。また明治時代の開業医の履歴書・種痘免許状・種痘状（種痘後の検診で種痘が成功したことを示す証明書）などの古文書類、種痘器・人工気胸器（図2）などの医療機器の展示が行われた。

もう一つの企画展は、『杉田玄白と小塚原の仕置場』（荒川区立荒川ふるさと文化館 平成19年2月10日－3月11日）である（図3）。この企画展には、記念講演「江戸の解剖とその史蹟」の講師として関った。旧幕時代の小塚原の仕置場は、現在荒川区を代表する史蹟の一つとなっている。小塚原の仕置場では磔刑・火刑・梟首（獄門）が執行されただけでなく、腑分も行われた。江戸の町で腑分が行われたのは、この小塚原の仕置場と小伝馬町牢屋敷の2箇所である[1]。

千葉大学大学院医学研究院循環病態医科学

Takeshi Ishide: Autopsy in Edo period and execution place in Kozukahara.

Department of Cardiovascular Medicine, Graduate School of Medicine, Chiba University, Chiba 260-8670.

Tel. 043-222-7171. Fax. 043-226-2096.

Received September 25, 2007.



図1 『村のお医者さん』展示パンフレット

表紙には駒氏2代の写真が配されている。

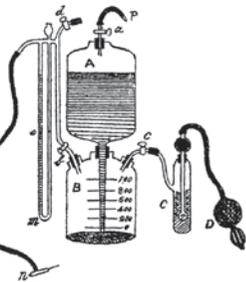


図2 人工気胸器

村尾圭介・田澤正郎によるもの。『醫科器械學雜誌』(1931; 9: 98-9) 収載。nが穿刺用針。筆者が人工気胸器による治療を経験した患者から問診した話では、外来診療室で使用された。膿胸をおこすことがあったという。

明治8年(1875)3月4日杉田玄白・前野良沢・中川淳庵らが立合った小塚原の仕置場における腑分は、医学史上特筆されている。荒川区の公立小学校では、「杉田玄白らの腑分」と「小塚原の仕置場」に関する学習を行っているということである。講演では、この学習課程で小学生から出された幾つかの疑問点を中心に、史料の紹介と考察を加えて解説を行った。本稿では講演内容を基



図3 荒川ふるさと文化館の案内パンフレット

東京都荒川区南千住6-63-1。国道4号線(旧日光街道)に面した素盞雄神社の裏手にある。神社の境内には、「小塚原」の語源の一つといわれる塚がある。小塚原の語源には、他にも古塚原・骨ヶ原などが挙げられている。パンフレット表紙の橋は、慶応元年(1865)の千住大橋である。

に、(1)腑分は何故小塚原の仕置場で行われたのか(2)杉田玄白らの腑分の意義(3)幕府の医師による腑分について論ずる。

猶講演にあたって、本学名誉教授永野俊雄・橋正道両先生には、御夫妻で御来駕いただいた。

腑分は何故小塚原で行われたのか

幕政下で腑分の対象となったのは、斬首刑に処せられた庶民層の罪囚である。斬首刑は重い順に獄門(梟首)・死罪・下手人となる。死罪の遺体は様斬(ためしぎり)に供用された。田代基徳は、旧幕時代梟首以上の罪囚が腑分の対象となったとしているが[2]、死罪の遺体も供用された可能性は残る。供用されなかったとしたら、御様御を家業としていた山田浅右衛門との競合が考えられる。

幕府管轄下の罪囚の斬首刑は、高位にある罪囚



図4 『杉田玄白と小塚原の仕置場』展のポスター

写真の石地藏（延命地藏）は花崗岩を組んだもので、仕置場に安置された。胴の部分が外されている。川鍋暁斎の弟子としても知られるブラックによる、小塚原最古の写真。『THE FAR EAST』volⅢ, NO. XX (1873. 3. 17) 収載。

を除いて小伝馬町牢屋敷の処刑場で執行された。処刑された遺体は牢屋敷の裏門を出て、小塚原回向院の墓地に運ばれ、そこで浅く掘った穴の中に土を被せただけで取り捨てられた(図4)。江戸時代、明治維新に至るまで江戸の仕置場として長く定着していたのが、小塚原と鈴ヶ森の仕置場である。「腑分は何故小塚原で行われたのか」を論ずるためには、江戸の仕置場と罪囚の埋葬地の歴史について知る必要がある。

江戸の仕置場は、幕府成立当初は現在の中央区日本橋本町にあったが、後に浅草鳥越橋北詰に移り、さらに当時浅草聖天町にあった西方寺の門前に移転して、最終的に小塚原に落ち着いた。本所回向院は、明暦3年(1657)1月の大火(振袖火事)の犠牲者を葬うために、幕府が建立した寺であるが、万治年間(1658-61)町奉行により、牢死者・行路人の埋葬を命ぜられた。後に墓所が手狭になったため、寛文2年(1662)町奉行から小塚原の仕置場に寺地を与えられて、別院(常行堂)を建立し埋葬された者の供養を行った。猶、小塚原の仕置場には江戸市中の牛馬も埋葬された。

寛文9年(1699)には、下谷浅草の各宗派寺院内にあった五三昧(火葬寺)が小塚原に移転し、19世紀初頭にはその数19にのぼった[3]。こうして、江戸の町の朱引外の北の地に一大火葬埋葬センターができあがったのである。

江戸のもう一つの代表的仕置場であった鈴ヶ森の刑場は、慶安4年(1651)大井村(現品川区大井)に設けられた。しかし文久2年(1862)に鈴森山大経寺が建立されるまで、寺院は設けられなかったようである。また安藤広重の浮世絵「東海道五十三次」のうち、品川宿を描いた『日の出』に見られるように、品川宿はすぐ際まで海岸が迫っており、波に洗われ易い場所であった。従って遺体の埋葬地としては不適當であったと考えられる。

小伝馬町の牢屋敷には、山田浅右衛門とその一門が様斬を行う場所(土壇)が設けられていたが、腑分を行う場所はなかった。管見した限りでは、腑分を小塚原の仕置場で行うように定めた町奉行発給の文書は見出されていない。しかし寺と埋葬地が揃った仕置場は、腑分を行う場所として最も適していたであろう。

杉田玄白らの腑分の意義

明和8年(1771)3月4日杉田玄白・前野良沢・中川淳庵らが関った小塚原における腑分は、江戸時代全期間を通じて、医学史上最も有名な出来事の一つである(図5)。では玄白らの腑分にはどのような意義があり、何故高く評価されているのであろうか。

1. 江戸時代に最初に行われた腑分であったのか。
 2. 詳細な腑分の記録・図などを残したのか。
 3. 玄白ら医師自身の手で腑分を行ったのか。
- これらの間に対する答は、いずれも「否」である。玄白はその著『蘭学事始』でこの時の腑分の様子を次のように記している[4]。

その日より前迄の腑分といへるは、えたに任せ、彼が某所をさして肺なりと教へ、これは肝なり、腎なりと切り分け示せりとなり。それを行き視し人々看過して帰り、われわれは直に内景を見究めしなどいひしまでのことに



図5 小塚原回向院の「観臓記念碑」

荒川区南千住 5-33-13。前野良沢・杉田玄白らの業績を讃えて、大正11年（1922）奨進医界によって建立されたが、戦時中空襲で損壊。青銅製の碑板は盗難にあったため、昭和34年日本医史学会・日本医学会・日本医師会によって再建された。

てありしとなり。（中略）老屠また曰く、只今まで腑分のたびにその医師がたに品々をさし示したれども、誰一人其は何、此は何々なりと疑はれ候御方もなかりしといへり。

玄白ら以前の腑分の見学は、文字通りの見学で、中国の医学書の記述の様であると納得して帰ったということであろう。しかし、玄白はさらに次のように記述している。

官医岡田養仙老、藤本立泉老などはその頃まで七八度も腑分し給ひしよしなれども、みな千古の説と違ひしゆゑ、毎度毎度疑惑して不審開けず。その度々異状と見えしものを写し置かれ、つらつら思へば華夷人物違ひありやなど著述せられし書を見たることもありしは、これがためなるべし。

幕府の医師岡田養仙（1722-97）と藤本立泉（1703-69）は、腑分に立ち合った際、穢多の説明に必ずしも納得していた訳ではなかったのである。『臓志』を著した山脇東洋（1705-62）は、腑分を実見して、従来の中国の医学書における人体構造の記述が、正確さを欠いている事を認識した。

玄白らの認識が、山脇東洋・岡田養仙・藤本立泉らと異っていた点は、ドイツ人医師クルムス Johann Adam Kulmus が著した解剖学書が非常に正確であり、正確な人体構造を知るためには、オランダ語に訳された“Tafel Anatomia”の翻

訳が必要であると考えたことにある。これらを勘案すると、玄白らの業績について以下のようにまとめることができるであろう。

1. ドイツの医学者クルムスの解剖学書“Anatomische tabeller”のオランダ語訳“Ontleedkundige Tafelen”のできるだけ正確な翻訳を行った。不明な語については、その通りに記した。また翻訳にあたって、神経・軟骨などの用語も創出した。
2. 日本語に翻訳したものを『解体新書』として出版し、広く世に知らしめた。
3. 以後蘭学の研究が盛んになった。

猶、“Tafel Anatomia”という書名については、玄白らがオランダ語の翻訳本の通称として用いたものではないかという、指摘がある[4]。

ところで、オランダ語の解剖学書を本邦で最初に翻訳したのは玄白らではない。長崎の通詞本木良意（1628-97）が、ドイツ人レムメリン Johan Remmelin の著“Pinax Microcosmographicus”の蘭訳書から邦訳した『和蘭全軀内外分合図』が最初といわれている。この本は良意の存命中には公にはされず、没後80年近くを経て、明和9年（1772）周防の人鈴木宗伝によって出版された。

この明和9年という年は、①玄白らが腑分を見学した翌年②『解体新書』の内容見本というべき『解体約図』出版の2年前③『解体新書』出版の3年前にあたる[5]。杉田玄白は『解体新書』の出版を急いだということであるが、『和蘭全軀内外分合図』の出版と無関係とも思えない。筆者はこの書物を実見していない為推論になるが、その書名があまり知られていないところをみると、『解体新書』に較べて、少くとも教科書としては不十分な内容であったのではないだろうか。

長州藩々医栗山孝庵（1728-91）が宝暦9年（1759）6月21日萩城下大屋刑場で、女性の刑死体の腑分を行った際、執刀したのは長崎出身の外科医田英仙であった。医師が直接手を下して行った、本邦で最初の腑分といわれている[6]。玄白らの当時（1771）、猶小塚原で実際に腑分を手がけていたのは穢多であった。小塚原の仕置場特有の問題があったのであろう。

幕府の医師による腑分

明和8年3月4日小塚原で行われた腑分の主役は、後に『解体新書』を著した杉田玄白らではない。『蘭学事始』によると、この腑分は「手医師何某」の為に用意されたものである。同書にこの「手医師何某」の姓名は記されていない。手医師とは「抱え医師」の意味である。町奉行からみて「抱え医師」とは、大名家の抱え医師ではなくて、幕府の抱え医師のことであろう。

やはり同書で玄白は、彼らより以前に官医岡田養仙(1722-97)と藤本立泉(1703-69)は、既に7、8度の腑分を行っているとして記している。これまでに幕府の医師による腑分が記録上確認できるものは次の3件である。(1)安政6年(1859)8月長崎でポンペPompe van Meerdervoortと松本良順によって行われた腑分(2)同年10月幕府の種痘所が小塚原で行った腑分(3)文久元年(1861)12月幕府が小伝馬町牢屋敷で行った腑分。しかし岡田養仙・藤本立泉以降安政6年8月まで、幕府の医師による腑分が行われなかったとは考えにくい(図6)。

前項で紹介した『蘭学事始』中の官医岡田養仙と藤本立泉に関する記述から、養仙らが腑分を観察した内容を記録していた事が判る。養仙らが残した腑分の観察記録は何処にいったのであろうか。

近年磯野直秀氏が発掘紹介された史料に、本



図6 発掘された頭骨

朝日新聞掲載の記事。平成10年(1998)荒川区南千住の旧小塚原の仕置場跡地から、つくばエクスプレス(TX)の工事中に発掘された。頭部のみ105体分あり、刀傷とおぼしき跡がみられるものもある。

草家後藤光生(1696-1771)が著した『随観写真卷十九 人部』(東京国立博物館蔵)に収載された腑分図がある[7]。この腑分図は、宝暦6年(1756)8月幕府医師のグループが小塚原の仕置場で腑分を行った際に記録された腑分図の写しである。この2年前に京都で山脇東洋らによる腑分が行われている。宝暦6年の腑分図は、現在見出されている小塚原における最も古い腑分の記録である。時期を考慮すると、この腑分には岡田養仙・藤本立泉からも参加していた可能性が考えられる。現時点で後藤光生が遺した腑分図の原本は見出されていない。

幕府の医師が幕命で腑分を行った場合には、必ずその報告書を幕府に提出していたであろう。しかし前述の(1)~(3)の腑分も含めて、管見した限りでは幕府の医師による腑分の観察記録は見出されていない。何故見出されていないのか。幕府が行う事業については、民衆に周知させる必要はなかったであろうか。よく知られた例として、幕府の刑法に関する基本法典である『御定書百箇条』が挙げられる。

蘭学の研究においても、その成果が将軍に献上されただけで、一般には公開されなかった例があることが知られている。青木昆陽(1698-1769)と共に八代将軍吉宗から最初に蘭学研究を命ぜられた医師野呂元丈(1693-1761)は、オランダ人外科医ムスクルスPhilip Pieter Musculus、オランダ語通詞中山喜左衛門・今村源右衛門らの助けを借りて、ドードネウスRembertus Dodonaeusが著した本草書“Cruydt-Boeck”の翻訳を行い、『阿蘭蛇本草和解』を完成させた。しかしこれは将軍吉宗に献上されただけで、一般には公表されなかった[8]。

幕府の医師による腑分の記録が明かではない以上、山脇東洋らによる腑分を本邦初とするのは早計ではないであろうか。少なくとも「現在判明している限りでは」という注釈が必要ではないかと考えられる。

おわりに

大名領で行われた腑分では、対象となった罪囚に戒名を与えて慥に葬ったという記述がしばしば

みうけられる。しかし幕府の管轄下にあった小塚原の仕置場で行われた腑分では、管見した限りこのような例はみられない。高飛車な印象がある。

明和8年(1771)小塚原の仕置場で杉田玄白らが腑分の見学をしていた当時、英国のロンドンでは、スコットランド出身の著名な外科医で解剖学者ジョン・ハンター John Hunter (1728-1793)が、ヒトのみならず多種多様な動物の解剖に取り組んでいた。生涯に解剖したヒトの数は数千体に及ぶといわれ、多くの標本を作製し、比較解剖学・生物進化に関する業績も残している[9]。

当時の江戸とロンドンとは、人体解剖を行ううえでの条件が非常に異っていた。幕府によって腑分を制限されていた江戸の医師と異り(何故制限されていたのかを考える必要があるのだが)、ロンドンでは遺体を手に入れさえすれば解剖を行うことができた。また解剖に供された多くの遺体は、売買・盗掘によって得られたものであったといわれている。

ジョン・ハンターは病理解剖をも行っていた。彼が行っていた解剖は単に臓器の確認にとどまるものではなく、実験科学の一部をなしていた。一方、杉田玄白はその門下から多くの蘭学者を輩出したものの、その解剖学に対する立場は、結局書誌学の範疇を出なかつたのではなからうか。玄白が明和8年に腑分を見学して以降明治に至るまで、本邦においては、解剖学・生理学に関する新知見(世界最初の発見ということの意味しているわけではない)が、ほとんどみられなかつたことから明らかであろう。

今回荒川ふるさと文化館から講演を依頼されてきた経緯は、筆者が以前本誌に上梓した「江戸の腑分」[1]を読まれてということであった。本誌が意外なところで読まれていることを知った次第である。

稿を終るにあたって、講演の機会をお作りいただいた荒川区立荒川ふるさと文化館学芸員亀川泰照・野尻かおるの両氏、および講演終了後、御自身の蘭学研究的御労作を御恵送いただいた東京学芸大学名誉教授大澤浩氏に深謝する。

SUMMARY

At the Kozukahara execution place in the Edo period, execution by crucifixion and burning, and public display of the severed head were carried out. In the ground, dead bodies as well as dead cows and horses were buried and dissection of the human body was also performed occasionally on executed corpses. The plausible reason as to why anatomical dissection was performed at the Kozukahara execution place is deemed to be that it was the burial site for criminal prisoners executed and thus served as a convenient place for the administration of the dead body. Special reference has been made in the history of Japanese medicine to the dissection of the corpse witnessed at the execution place by Genpaku Sugita and colleagues in 1771 (Meiwa 8 in the Edo period). Comparing the inner structure of the human body they actually saw, they were convinced of the accuracy of anatomical descriptions given in the Dutch anatomical textbook "Tafel Anatomia," the origin of which was found in Germany; and they translated the book into Japanese for publication. This led to the subsequent popularity of Dutch learning. These events were held as prominent contributions made by them. From descriptions found in the book "Rangaku Kotohajime" (The Beginnings of Dutch Learning) by Geupaku Sugita, it is evident that official doctors for the Bakufu government such as Yousen Okada and Ryusen Fujimoto attended the session of anatomical dissection since early days. Further, in the closing days of the Tokugawa Bakufu government, it was on record that doctors at the Bakufu's vaccination center performed anatomical dissections. However, no details of their observation nor any observational records of anatomical dissections performed by other Bakufu official doctors have so far been identified. This might be implicated in the non-disclosure policy adopted by Bakufu. Hence, in view of the absence of such relevant documentations, it appears difficult to draw a firm conclusion that the anatomical dissection performed by Touyou Yamawaki, author of "Zoushi" (Record of Internal Organs), was the first of its kind in Japan.

文 献

- 1) 石出猛史. 江戸の腑分. 千葉医学 1998; 74: 1-7.
- 2) 石出猛史. 病體解剖社. 千葉医学 2002; 76: 7-14.
- 3) 荒川区立荒川ふるさと文化館常設展示図録. 東京都荒川区教育委員会編, 東京: 荒川ふるさと文化館, 2002.
- 4) 杉田玄白. 緒方富雄校註. 蘭学事始, 東京: 岩波書店, 1959.
- 5) 小川鼎三. 日本学士院日本科学史刊行会編 明治前日本解剖学史 明治前日本医学史第一巻 増訂復刻版, 東京: 日本古医学資料センター, 1978: 52-249.
- 6) 田中助一 酒井シズ編. 栗山孝庵と二つの石標 医界風土記中国・四国編, 京都: 思文閣出版, 1994: 161-4.

- 7) 磯野直秀. 宝暦六年の人体解剖図, 科学医学資料研究, 1994; 240: 9-12.
- 8) 岡村千曳. ドドネウス CRVYDT-BOECK の邦訳について (1) (野呂元丈 - 平賀源内 - 石井恒右衛門・吉田正恭等), 医学のあゆみ, 1959; 28: 428-35.
- 9) ウェンデイ・ムーア. 矢野真千子訳. 解剖医ジョン・ハンターの数奇な生涯, 東京: 河出書房新社, 2007.
-